

初夏の 「ユニバーサルガーデン」にて

コピーライター 森 由香

もり ゆか さん



札幌市の広告制作会社勤務を経て、現在は「企画制作室mc m」で広報・広告に関する企画&原稿制作に従事。「北海道」と「農業」の情報発信にかかわるべく、道内各地の取材に走り回っている。季刊誌「カイ」編集・ライター、月刊誌「農家の友」編集委員。北海道フードマイスター、農都共生研究会メンバー。

◆ネーミングに参りました！

2013 上半期ベスト3

コピーライターの仕事の一つに「ネーミング」があります。どんなにいい商品でも、ネーミングがいまいちで売れ行きが伸びないことは多々あります。「あそこ、なんていう名前だっけ？」なにかいつまでたっても覚えてもらえないお店もあります。ネーミングの依頼があると、けっこうプレッシャーです。名前はずつと残るものなので、ネーミングの教科書的な本も出ていて、

そこには、「セールスポイントを分析し、ターゲットを見極め、市場状況を把握し……」など難しいことが書かれています。もちろん、それは大切な行程なのですが、そこからさらに実際の名前を考えていくのも時間がかかります。カタカナ、漢字、外国語、さらには言葉を組み合わせた造語、擬音や擬態語、理にかなっていけばダジャレだってあります。語感はいいか、覚えやすいか、さらっと流されないかなども検証します。「これだ！」と思っても、同じ業種

で似たような名前があればボツになります。ネーミングについてちよつと書くつもりが長くなってしまいました。日頃のうつぶんが出てしまったでしょうか。つまり、仕事としてはなかなか悩ましいネーミングなのですが、実際に商品を作った人や活動に関わる人たちの作ったネーミングに、「参りました！」ということも度々ありまして。そこで、今年に入ってから取材先で出会った秀逸なネーミングをご紹介します。二〇一三年上半期ベスト3ということ

で。まずは、前回のエッセイでも紹介しました、女性農業者を中心に結成されたNPO法人『ココ・カラ』。地元食材の魅力を伝える活動から、「こころとからだ」、「ここからはじまる」という二つの意味を込めています。ふつうの言葉を上手に生かしたすてきなネーミングです。

次は『むすびば』。この名前は愛称で、正式名称は「東日本大震災市民支援ネットワーク・札幌」です。震災直後から家具や家電を集めるなど、避難者の受け入れにい

ち早く取り組んだ活動を記憶している方も多いでしょう。何か助けになりたいと集まった九〇人近くの話し合いの中で、自然発生的に決まった名前だそうです。まさに人と人をつなぐ「場」を今も提供し続けています。

そして、三つめは『コロポロン』。千歳市泉郷のファームレストラン「花茶」で、昨年から開園したユニバーサルガーデンの名前です。木の実の落ちる音をイメージしたそうで、「楽しくて明るい気分になれるでしょ」とオーナーの小栗美恵さん。アイデアも語感も申し分なし。これには、目からうろこもコロポロンでした。

◆庭を楽しみ、庭で働ける

福祉の庭「コロポロン」

小栗美恵さんに初めてお会いしたのは、「ケータリング美利香（ぴりか）」の取材でした。農家の仲間たちと一緒に、地元の農産物を生かした料理を作り、パーティーやイベントなどに料理を提供するケータリングサービス。これもまた発想がユニークな



ユニバーサルガーデン「コロポロン」を実現させた小栗美恵さん

活動です。

最初に小栗さんと話をした時は、ちよつと驚きました。

見た目はきやしゃやで柔らかい印象なのですが、話しだすと切れ味鋭い言葉がややハスキーな声で語られます。サバサバとして決断が早く、男らしい感じといますか（良い意味ですよ）。こうしてまた一人、魅力的な女性農業者と知り合うことができました。そんな小栗さんから、「ユニバーサルガーデンを始めた」と聞いたのです。花茶には本当に多くの人が集まってきます。そんな中、社会的弱者の方の来店も増え、食事や農園を楽しむ様子を見ていて、



ガーデン遠景

ガーデンを訪れた人は、育っている果実や野菜を摘むことができます

ゆくゆくは何か福祉活動をできないだろうかと考えていたそうです。きっかけは、小栗さん自身のお母さんが事故に合い、車椅子を使うようになったこと。花が好きなお母さんを連れて出かけたとしても、車椅子で行けるところは限られます。な

らば、花茶に「ユニバーサルガーデン」を作ろうと思いい立ち、そして、その庭を社会的弱者の方の「働ける場」にすれば福祉活動にもつながると考えたわけです。

何かを思いついてからの小栗さんの吸引力がまたすごい。ガーデンや福祉関係者など応援する人がぞくぞくと現れて、その道のプロたちの知恵が集まり、花茶の農園の一角に『コロポロン』が出来上がったそうです。

その庭をぜひ見たいと思い、六月五日の



苗植え ひとつひとつ丁寧に苗を植えていく参加者。土いじりにみんな夢中

苗植えアップ 4月の種まきから10月の収穫まで、作業は参加者の手で行われる



苗植え会に参加させてもらいました。

天候に悩まされ続けた日々を追い払うように、その日は気持ちのいい初夏の陽気。苗植えに参加したのは、千歳市の就労支援センターに登録されている一〇名と、ボランティア四名です。花や野菜の苗を植え、

草を取り、水をまきと、テキパキ作業は進んでいきました。自分もちよつと手伝わせてもらったのですが、太陽の下で土にふれるのは本当に楽しいですね。ちゃんと根を張ってくれるだろうか、すくすく育つてくれるだろうか。自分が植えた苗はその後の成長も気になり、気分はすっかりわが子です。

作業が終わり、小さな花や緑がそよぐきれいなガーデンが出来上がりました。参加者もみんな晴れやかな顔で満足気です。このガーデンは楕円の「種」の形に設計されていますが、植えた種以上のモノヤコトが次々と育っていきそう…そんな楽しい予感がありました。

◆人の心を癒やす農業

その「価値」をあらためて

園芸療法や園芸福祉は、アメリカでは病院や福祉施設に当然のように取り入れられているようですが、日本ではまだ広がりつつあるという段階でしょうか。阪神淡路大震災の後、花や緑にふれる園芸作業が被災

者の心を支えたことから、兵庫県では「園芸療法士」の育成をはじめたという動きもあります。東日本大震災の被災者は、今後のPTSD（心的外傷後ストレス障害）が心配されており、園芸療法はますます注目される分野になるはずです。

農業体験は、春の苗植えや秋の収穫時期によく計画されますが、ふだんの農作業も体験してみたい消費者はけっこう多いと思います。トマトのわき芽を摘んだり、えんえんと草取りをしたり、畑の中でぼーっとするだけでも、十分な癒し体験となるからです。農業者のみなさんは「そんな地味なことでもいいの？」と思われるかもしれませんが、土と水と太陽は人間にも必要なのです。

ちまたでは、攻めの農業だ、集約だ、輸出だと、声高に言われていますが、農業の「価値」が農産物だけに思われているようでもうも納得できません。おなかを満たすだけじゃない、こころも満たしてくれる、計り知れない「農」の価値を、あらためて実感したユニバーサルガーデンでした。